

小学校教師の共感性と同僚性がバーンアウトに及ぼす影響

学校教育学専攻
臨床心理学コース
M08048A
石川 勝規

【問題と目的】

うつ病などの精神性疾患で休職した教師の数は、15年連続で増加している。このような状況の中、教師の苦悩やバーンアウトに目を向けようという動きが高まっている(伊藤, 2000)。

新井(2002)によると、教師のバーンアウトは個人特性に起因するというよりも、生徒や同僚との「関係機能の破綻」から生じる問題である。

また河村(2003)は、同僚との関わりが「やりがい」に強く作用することを指摘している。

鈴木(2006)は、教師の重要な資質として、共感性に着目し、教師の共感性の向上を目指した研究の必要性を提唱している。しかし、教師の共感を実際に測定した研究は非常に少ない。

教師にカウンセラー的な役割を期待されているが、共感的な対応を過度に求められることが、極度な疲弊につながっていると予想される。

多様な要因を含み込んで教師のバーンアウトの構造を検討した研究は少ない(伊藤, 2000)。よって、教師のメンタルヘルスを守るためにも、バーンアウトに影響を及ぼす要因を検討することは意義深いと考える。本研究では、小学校教師に焦点を当て、個人特性である共感性の水準と職場の人間関係が教師のバーンアウトに及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

仮説として、共感性の高い教師はバーンアウトに陥りやすい傾向があると考えた。また、同僚性の高い教師は、バーンアウトを回避していると思われる。よって、共感性が高くても同僚

性が高い教師であれば、バーンアウトせずすむのではないかと考えた。

【方法】

調査協力者：A 県内 15 校の公立小学校の教師合計 226 名に調査票を配布し、193 名から回答を得た(男性 84 名, 女性 109 名, 回収率 85.4%)。

この内、記入漏れを除いた 181 名(男性 81 名, 女性 100 名, 有効率 93.8%) が対象となった。

調査尺度：①「バーンアウト尺度 (17 項目, 4 件法)」(田尾・久保, 1996), 項目中の「患者」を「生徒」と修正して用いた。

②「多次元共感測定尺度 (28 項目, 4 件法)」(桜井, 1988) を用いた。

③職場の人間関係の測定には、「同僚性尺度 (18 項目, 4 件法)」(秋田・恒吉・村瀬・杉澤, 2004) を用いた。

調査時期：2009 年 2 月

手続き：各学校に直接配布し、郵送法で回収。

【結果】

共感性・性別とバーンアウトの関連

共感性合計得点 (平均点で高・低群に) と男女を独立変数とし、バーンアウト尺度の下位尺度を従属変数とした 2 要因の分散分析を行った。

分散分析の結果、「情緒的消耗感」において共感性の主効果がみられ ($F(1,177)=5.13, p<.05$), 低群よりも高群の得点が高かった。「個人的達成感の後退」においても、共感性の主効果がみられ ($F(1,177)=12.26, p<.01$), 高群よりも低群の得点が高かった。

同僚性・性別とバーンアウトの関連

上記と同様の手続きで2要因の分散分析を行った結果、「バーンアウト得点」において同僚性の主効果がみられ ($F(1,189)=3.84, p<.05$), 高群よりも低群の得点が高かった。「個人的達成感の後退」においても、同僚性の主効果がみられ ($F(1,189)=10.52, p<.01$), 高群よりも低群の得点が高かった。

共感性・同僚性とバーンアウトの関連

尺度間に有意な相関が見られなかったので、共感性と同僚性の各高・低群をペアで4群に分け、これらを独立変数とし、バーンアウト尺度の下位尺度を従属変数として分散分析を行った。分散分析の結果、「個人的達成感の後退」において ($F(3,177)=7.40, p<.001$), 「情緒的消耗感」において ($F(3,177)=7.40, p<.001$) で有意差が見られた。

共感性下位尺度とバーンアウトの因果関係

共感性の4つの下位尺度が、バーンアウトに与える影響を検討するために重回帰分析を行ったところ、すべての下位尺度において、「緊急時の混乱」からの標準偏回帰係数が有意であった。

【考察】

共感性が高いと情緒的に消耗をし、低いと達成感の後退は高まることが示された。また、同僚性が高いと達成感の後退は低いことが分かった。さらに、共感性・同僚性ともに高い人は、達成感は感じつつも、消耗感が高まり、バーンアウト傾向を示すことが明らかとなった。

共感性は、高くても低くてもバーンアウトにつながるリスクが高くなる傾向があることが示された。共感性のどの部分が影響を及ぼすか検討したところ、「緊急時の混乱」が有意に影響を与えていた。緊急事態において、混乱するのではなく、冷静に判断できる力が教師には必要で

あり、客観的に対応できる力を身につけていく必要があるといえよう。久保(2007)は、バーンアウトに陥らないためには「共感性をもって接することができるだけではなく、同時に、冷静で客観的な態度を堅持できる能力が必要である」と述べている。これら一見正反対に思える2つの姿勢を個人のなかで矛盾なく両立させる高度な技能が教師には求められていることを示唆する結果が得られた。

同僚性が低いと個人的達成感を得にくいということは、他者への働きかけが少ないと周りから認められにくい状況が作られるということであろう。新井(2002)は、バーンアウト予防に必要な要件は、「孤立させない職員間の協働意識」と述べている。バーンアウトに陥らないためにも、職場の同僚とのかかわりを積極的に求める方がメンタルヘルスを維持する上で重要であるといえよう。

共感性は教師にとって重要な資質の一つであるが、相手の感情に巻き込まれ、客観的な判断が困難な状況に陥ることでバーンアウトリスクを高めてしまうのではないかと推測される。一方、人との結びつきを求める同僚性の高さは、ソーシャルサポートを得る可能性があり、困難時には相談できる職場の同僚がいることがバーンアウトへの抑止力になりうることが示唆された。「共感性」と「同僚性」はバーンアウトにおいて重要な影響因であることが示された。これらのバランスが対人援助職としての職務特性として求められ、これらのバランスを欠いたときバーンアウトへのリスクを高めているものと考えられる。

主任指導教員	大野裕史
指導教員	岡村寿代